

これならわかるぜ！

## ためぐち漢文

——漢文の構造をわかりやすく知りたい君へ—— 漢文の句式編

### 【第7回】疑問（疑問の語気詞）

さあ、今日からは、疑問の形に入るぞ！

疑問の形にはいろいろな形式があるんで、難関だぜ！ 覚悟はできてるかい？

なに？ まかしとけって？ ようし、それじゃ頑張るぞ！

**疑問というのは、不審なことや不明なことについて問いかける形だ。**

「なんで笑うの？」って、不審だから理由を問いたい場合もあれば、「これ壊したの、君か？」って不明なことを問いたい場合もある。

まあいろいろあるわけだが、**疑問を表す形式は、疑問の語気を表す語気詞を用いるものと、疑問代詞を用いるものの2つに大別されるんだ。**

今回は、そのうち、初めの「疑問の語気詞を用いる形」について学ぼう。

#### 1. 疑問の語気詞とは？

君らさ、何かひとに問う時、「くか？」って言うだろ？

「君がやるか？」とか、「これ僕の弁当か？」とかさ。

「君がやる」は平叙文だけど、それに「か」をつけると、疑問の語気を表して疑問文になるだろ？

また、「これ僕の弁当だ」は平叙文、その「だ」を「か」にかえると、やっぱり疑問文になるじゃないか。漢文の疑問の語気詞もこれに似て、その**疑問の語気詞を文末に置くことで、疑問の語気を表して疑問文にする働きがあるんだ。**

**代表的な疑問の語気詞には、「乎」「邪」「耶」「与」「歟」「哉」などがある。**

どれも、「や」または「か」と読むんだ。

どういう時に「や」と読んで、どういう時に「か」と読むかは、また後で触れよう。

注意してほしいのは、今は疑問の形の講義だから、これらが疑問の語気を表すと説明したけど、反語の語気や感嘆・詠嘆の語気を表すことも、ごく普通にあるってこと。

え？ なんでって？

そりゃ、君らが使う日本語の「か」だって同じだろ？

そもそも、疑問、反語、感嘆・詠嘆ってのは、似た心理状態を表してるんだ。

たとえば、「それ、君がやるか？」って日本語だって、純粹に問いたい場合もあれば、「それ君がやる

か！やったらあかんやろ！」と反語の場合もあるし、「それ君がやるか…」とため息つきながら嘆く場合だってあるじゃないか。

おんなじなんだよ、疑問の語気詞も。

だから、その語気詞が疑問で用いられてるのか、反語で用いられてるのか、はたまた感嘆・詠嘆なのかは、結局のところどんな文脈、どんな状況で発せられた語気なのかを判断する必要があるんだ。

でも、今日は疑問の形の学習なんで、とりあえず疑問の用法に特化して説明していくぜ。

## 2. 単独で用いて判断を求める形

まずは、文末に「乎」「邪」「耶」「与」「歟」などの語気詞を置いて、相手に対して判断を求める形だ。たとえば「食<sup>ラウ</sup>桃<sup>ト</sup>」（桃を食べる）は平叙文だが、文末に「乎」を置くと、「食<sup>ラウ</sup>桃<sup>ト</sup>乎」（桃を食べるか？）と疑問を表すことになるよな？

そういう形で相手に問いかけると、相手は「（はい、）食べます」、または「（いいえ、）食べません」なんて答えることになるじゃないか。

つまり、相手に対して判断を求めて、その回答をまつことになるわけさ。

公孫丑問曰、仕而不受<sup>ルハケ</sup>禄<sup>ヨ</sup>、古之道<sup>コノミチ</sup>乎<sup>カ</sup>。曰<sup>イハク</sup>、非也<sup>ヒ</sup>。…」

▼公孫丑問<sup>コウソンチュウモン</sup>ひて曰<sup>イハク</sup>はく、「仕<sup>ツカ</sup>へて禄<sup>ロク</sup>を受けざるは、古<sup>コノミチ</sup>の道<sup>ミチ</sup>か。…」と。曰<sup>イハク</sup>はく、「非<sup>ヒ</sup>なり。…」と。

▽公孫丑が尋ねたことには、「（君に）仕えて俸禄を受けないのは、古の（正しい）道ですか。…」と。（

孟子が）言<sup>イハク</sup>つことには、「そうではない。…」と。

これは、孟子が長く滞在している斉の国にあって、王から禄を受けていなかったことについて、弟子の公孫丑が意図を問うたものだ。

禄<sup>ロク</sup>つてのは俸禄、まあ、わかりやすく言えば「給料」のことさ。

実は、孟子は斉の王様が正義を行える人物ではないと見抜いてて、うかつに俸禄を受けたりすると人情に縛られることになるから、わざと受けてなかったという裏事情があるんだ。

この例文、名詞述語の「古之道」の後に語気詞「乎」を置いて、「古の道か？」と判断を孟子に求める形をとってる。

それに対して、孟子は「非也」（そうではないのだ）と答えてるだろ？

もし逆に「その通りだ」なら、たとえば「然<sup>シカ</sup>」などと答えることになる。

この「古之道乎」の場合、「古の道か」と読んで、「古の道や」と読むことはない。

王曰、賢者亦有此樂乎。孟子対曰、有。

▼王曰はく、「賢者も亦た此の楽しみ有りや。」と。孟子対へて曰はく、「有り。」と。  
▽王がおっしゃるには、「賢者もこの楽しみがあるのか。」と。孟子がお答えするには、「あります。」と。

前の例にもあつた齊の宣王のお話さ。

この宣王、ご自慢の豪華な離宮に、孟子を招待したんだ。

それでおそらくは多少得意な気分で、「賢者にもこの楽しみがあるのか？」と問いかけたわけ。

「此樂」とは、豪華な離宮をもつ楽しみだよ。

「賢者亦有此樂」（賢者にもこの楽しみがある）なら平叙文。

その文末に疑問の語気詞「乎」を置くことで疑問文にすることができる。

ここでは問いかける対象の孟子に「あるのか？」と判断を求めて、孟子は「あります」と回答してる？

「乎」を用いて問いかけ判断を求める場合、回答がいつも「はい」か「いいえ」の形になるわけじゃない。

でも、答える側は肯定的な判断もしくは否定的な判断、あるいはどちらとも判断できないなど、何らかの判断を念頭に、意見を述べることになる。

ちなみに、孟子はこの後、真の賢者たるものは人民と楽しみを共にするのであって、民の上に立ちながら楽しみを共にしないのはよろしくないと、チクリと齊王を刺したんだぜ。

「有る乎」は、訓読では「有るか」と読んでもいいけど、「有る」の後に疑問の語気詞が置かれる場合、「有りや」と読むことが多い。

後で述べる語気詞の読み方のうち、「終止形＋や」の読みは、この「有りや」に特化したものといえ言過ぎかもしれないが、それに近いものがある。

王之所大欲、可得聞与。

▼王の大いに欲する所は聞くを得べきか。

▽王様の大いにお望みのことはお伺いできますか。

「与」も疑問の語気詞だよ。

後には疑問の語気詞の場合は「歟」と表記されるようになる字で、先秦期には「与」がよく用いられたんだ。

他の国と戦争を構え、家臣の命を危うくし、諸侯に恨みをかうような行いをして心地よいかと孟子に問わ

れた斉の宣王は、いや、大いに望むことがあるからだと答えたんだ。  
これは、それに対する孟子の問いかけの言葉さ。

王の大いに望む内容を、聞くことができるか否かの判断を求めたものだね。

訓読ではこのような場合、「聞くを得べきか」と読むのが普通で、「聞くを得べしや」とはあまり読まない。

さて、宣王の望みは領土を広げ、天下に君臨することだったんだけど、孟子は武力で他国を攻めることによってそれを目指すのは、「木に縁<sup>よ</sup>りて魚を求むる」ようなものだと言く。

「縁<sup>ヨ</sup>木<sup>ニ</sup>求<sup>ム</sup>魚<sup>ヲ</sup>」は有名なことばだよな、意味知ってるかい？

木によじ登って魚を求める、つまり目的と手段が一致しないことの喩えだぜ。

さて、「乎」「与」「歟」などの語気詞を「や」と読むのか、「か」と読むのか、迷うよな。  
これについては、訓読の習慣で、だいたい次のように読み分けている。

#### ・疑問の語気詞の読み方

ア、直前に読む語が名詞または活用語の連体形の時↓「か」

傷<sup>きず</sup>人<sup>ツクル</sup>乎<sup>カ</sup>。 ・ 人<sup>ヒト</sup>乎<sup>カ</sup>。

イ、直前に読む語が活用語の終止形の時↓「や」

傷<sup>きず</sup>人<sup>ツクル</sup>乎<sup>カ</sup>。

ウ、疑問代詞と共に用いる時↓「や」

何<sup>ナニ</sup>傷<sup>ツクル</sup>人<sup>ヲ</sup>乎<sup>カ</sup>。

↓直前に読む語を連体形で読み、「乎」を「や」と読む。

この読み分けについてはけっこう曖昧で、ルールに従われない場合もあるから注意が必要。  
そもそも日本の古典文法では、「たれか」「いかで」などの疑問を表す語が伴わない時は助詞「や」を用い、伴う場合は「か」を用いるのが通例だよな。

たとえば『伊勢物語』第九段「東下り」で有名な和歌「名にし負はばいざこと問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」などは、「あるかなきか」とは表現されていないし、「たれかある」とはいつでも「たれやある」とはいわないだろう？

ところが、漢文訓読の場合はその限りではなくって、疑問を表す語が伴わない時でもアの読み方をするところがあるんだ。

また、右の表のようにまとめはしたけど、前にも述べたように、実際にはイの「終止形＋や」の読み方は、「有りや」に限って頻繁にみられるもので、ほかはそれほどでもない。

だから、疑問代詞が伴わずに語気詞単独で用いられてる場合は、まあ「連体形＋か」で読むと考えていいだろう。

◎ポイント！…「乎」「邪」「耶」「与」「歟」「哉」などの疑問の語気詞を文末に置くことで、疑問の

語気を表して疑問文にする働きがある。

A 乎<sup>か</sup>・A スル<sup>スル</sup>乎<sup>か</sup>・A スヤ<sup>スヤ</sup>乎<sup>か</sup>

▼A か<sup>か</sup>・A するか<sup>か</sup>・A すや<sup>すや</sup>

▽A か<sup>か</sup>・A するか<sup>か</sup>

### 3. 否定副詞と共に用いて推測の語気を表す形

「あなたは鈴木さんではないですか？」って聞くことあるだろう？

それって疑問文だけれども、おそらく鈴木さんだろうという推測のもとに質問することが多いよな。漢文にも同じような表現形式があるんだぜ。

若<sup>ハ</sup> 非<sup>ス</sup> 吾<sup>ガ</sup> 故人<sup>ニ</sup> 乎<sup>ト</sup>。

▼若<sup>なんぢ</sup>は 吾<sup>わ</sup>が 故人<sup>こじん</sup>に 非<sup>あら</sup>ずや。

▽あなたは私の旧友ではないか。

これはどの教科書にも載ってる、項羽の最期の場面だね。

激戦の中、敵軍の騎兵隊長呂馬童<sup>りよばどう</sup>を見てこう呼びかけたんだ。

おそらく自分の旧友だろうという推測のもとでなければ、問いかけたりしないよな？

「若<sup>ハ</sup> 非<sup>ス</sup> 吾<sup>ガ</sup> 故人<sup>ニ</sup>」なら「あなたは私の旧友ではない」という否定の判断文だけど、文末に疑問の語気詞「乎」を置くことで「くではないか？」と、推測をもとに相手に問いかけることになる。

この形式は「非<sup>ス</sup>」が否定的判断を表す副詞なんで、名詞述語を修飾から、「非<sup>ス</sup> A<sup>ニ</sup> 乎<sup>ト</sup>」のAは名詞か名詞句になる。

「ここも「故人」という名詞述語を「非<sup>ス</sup>」は修飾してるよな？ よく確認しててくれ。

「非<sub>レ</sub>A 乎」の形は、普通は「Aに非<sub>レ</sub>ずや」って読むんだが、まれに入試問題なんかで「Aに非<sub>レ</sub>ざるか」と読んでもあるのも見かけすることはある。

「Aに非<sub>レ</sub>ざらんや」とは絶対に読まないから、気をつけろよ。

君 不<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>夫<sub>一</sub>羊<sub>一</sub>乎。

▼君<sub>レ</sub>夫<sub>一</sub>の羊<sub>一</sub>を見<sub>み</sub>ずや。

▽わが君はあの羊を<sub>レ</sub>ご覧にならないですか。

この例も、わが君は羊を見たことがあるはずだという推測のもとに問いかけたものだ。

「不<sub>レ</sub>A 乎」の形は、述語Aが否定副詞「不」の修飾を受けるから、Aは動詞または形容詞になる。

動詞の場合は「く(セ)ずや」、形容詞の場合は「く(ナ)ずや」と読むんだ。

まれに「A(セ)ざるか」「A(ナ)ざるか」と読まれることもあるね。

これも「Aせざらんや」とは読まないから、ご注意。

◎ポイント……否定副詞「非」や「不」と疑問の語気詞「乎」を組み合わせ、ある程度の推測をもとにした疑問を表す。

非<sub>レ</sub>A<sub>二</sub>乎。 ▼Aに非<sub>あ</sub>ずや。(Aは名詞または名詞句)

▽Aか。・Aするか。

・「Aに非<sub>レ</sub>ざらんや」とは読まない。

不<sub>レ</sub>A<sub>二</sub>乎。・不<sub>レ</sub>A<sub>ナ</sub>乎。 ▼Aせずや。(Aは動詞)・Aならずや。(Aは形容詞)

▽Aしないか。・Aではないか。

・「Aせざらんや」「Aならざらんや」とは読まない。

#### 4・選択疑問の語気を表す形

君たちが疑問を表すために使ってる「か」ということは、他にどんな使い方をするかな？

「今日のお昼は何食<sub>レ</sub>べたい？ カレーにするか、それともラーメンにするか？」なんて使い方もするだ



ろ？

これは選択疑問を表してるわけ、どっちにする？ってことだな。

これと同じように、疑問の語気詞「乎」などは、選択疑問の語気を表すこともあるんだ。

滕<sup>ハ</sup>小<sup>コ</sup>国<sup>コク</sup>也。問<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>齊<sup>ニ</sup>楚<sup>ニ</sup>。事<sup>シ</sup>齊<sup>ニ</sup>乎、事<sup>シ</sup>楚<sup>ニ</sup>乎。

▼滕<sup>トウ</sup>は小<sup>セウ</sup>国<sup>コク</sup>なり。齊<sup>セイ</sup>楚<sup>ソ</sup>に問<sup>かん</sup>す。齊<sup>セイ</sup>に事<sup>ツカ</sup>へんか、楚<sup>ソ</sup>に事<sup>ツカ</sup>へんか。

▽滕は小国である。齊の国と楚の国の間に位置する。齊に仕えようか、（それとも）楚に仕えようか。

滕の国は、戦国時代の小国だよ。

大国の齊と楚にはさまれて、どちらにくみすれば生き延びていけるかという切実な問題を、滕の文公が孟子に向けた問いだ。

つまり、文公自身の迷いでもあり、選択のアドバイスを孟子に求めたわけだ。

この選択疑問の形式は、例のように並列する「事<sup>フ</sup>齊<sup>ニ</sup>」、「事<sup>フ</sup>楚<sup>ニ</sup>」の2句の句末に疑問の語気詞「乎」を置いて、選択疑問を表すんだ。

もちろん、2句以上、たとえば「食<sup>ラ</sup>桃<sup>ハ</sup>乎、食<sup>ラ</sup>栗<sup>ハ</sup>乎、食<sup>ラ</sup>芋<sup>ハ</sup>乎。」なんて場合もあるよね。

◎ポイント！…並列する2句の句末に疑問の語気詞を置き、「A乎、B乎」の形で、選択疑問を表すことがある。

A<sup>ハ</sup>乎、B<sup>ハ</sup>乎。

▼A<sup>ハ</sup>せんか、B<sup>ハ</sup>せんか。

▽A<sup>ハ</sup>しようか、（それとも）B<sup>ハ</sup>しようか。

## 5. 疑問代詞と共に用いて疑問の語気を表す形

疑問文には、「何が」とか「誰が」とか「何を」とか「なぜ」を伴って表現するものもあるよな。

「何が問題か？」とか「誰がこの花瓶を割ったのか？」とか「なぜやめようとするのか？」とかさ。

この場合、日本語では「何が問題だ？」とか「誰がこの花瓶を割ったの？」とか「なぜやめようとするの？」のように、最後に「か」をつけなくても立派に疑問を表すことができる。

「か」は必須じゃないだね。

同様に、漢文の場合も「何」とか「誰」という疑問代詞を用いて疑問を表す場合、疑問の語気詞は必ずしも必要じゃない。

たとえば、「何を食べる？」は「何食」で、それで十分意味は通じる。

でも、その文末に疑問の語気詞を置いて、「何食乎」として、さらに疑問の語気を添えることがあるんだ。

それはあたかも「何を食べる？」に「か」をつけて「何を食べるか？」と言つようなもんだね。

### 三子之才能、誰最賢哉。

▼三子の才能は、誰か最も賢なるや。

▽三人の才能は、だれが最も賢いか。

「だれが最も賢い？」は、「誰最賢」でも十分に疑問文として成立する。

そこへ文末に疑問の語気詞「哉」を置くことで、「だれが最も賢いか」という疑問の語気を添えてるんだ。訓読では、疑問代詞が伴うんで、語気詞の直前に読む語を「賢なる」と連体形で読み、語気詞自体を「や」と読む。

ちなみに、疑問代詞が伴う疑問文は、文末に語気詞「也」が置かれることが多い。

たとえば右の例なら、「誰最賢也」という形になる。

この場合、語気詞「也」は訓読では「や」として、「誰か最も賢なるや」と読むことになる。じゃあ、「也」も疑問の語気詞なのか？ということになると、これはちと難しい問題なんだ。疑問代詞が伴わず、単独に「也」だけで疑問を表す例が全くないわけではない。

でも、極めて例が少ないんだな。

中国の語法書などでは、ごく普通に「也」は疑問の語気を表すと書いてあるし、日本の漢和辞典にもそう述べられてるんだが、ためぐち先生はやや懐疑的だな。

やっぱり「也」は判断の語気を表していると思うんだ。

たとえば日本語で「だれが最も賢いのだ」と言つたとして、「だ」は疑問の意味なのか？それと似てるんじゃないかな？

「誰最賢乎」は「だれが最も賢いか？」って意味だけど、「誰最賢也」は「だれが最も賢いのだ？」だと思うぜ、ためぐち先生は。

まして、「誰か最も賢なるや」と読むから「也」は疑問の語気を表しているなんて考えるのは、もう方向が逆で話にならんよ。

さて、この疑問代詞には、いろいろあるんだが、それは次回の講義にしよう。  
語気詞の働き、わかったかな？よく復習しとけよ。